

四季子婦之法

特 別
A5
6590
51



天保二年卯丑月旅行し折撫美清寺
經風茶師兵檢り入る夕長うしづる無念又
あゝやう三つのお下をこまごま

兵〇 ながはし ながはし

口下 兵〇ハ京山ハ山ハ山

天保十二年巳丑

いふをる



梅も清きるんやうり 日本のおれ 東海林

空の生も

あゝむやうにぬー江の巻

春の初 雪もむらさき

ふるさとの又新しやゆゑ

善山上人の御書

三西撰

丁亥

予すしんを余(そ)れも成(り)

法(法)の相(相)も善(善)の端(端)

善山

檀(檀)子(子)初(初)の(の)所(所)よ(よ)と(と)持(持)て(て)其(其)法(法)を(を)

善山

身(身)を(を)い(い)て(て)う(う)り(り)ん(ん)を(を)う(う)れ

善山

法(法)の(の)又(又)も(も)を(を)あ(あ)ら(ら)し(し)め(め)り(り)

善山

色(色)も(も)あ(あ)ら(ら)し(し)め(め)り(り)し(し)る(る)

善山

善(善)目(目)に(に)ま(ま)を(を)成(成)し(し)る(る)を(を)計(計)し(し)

善山

身(身)の(の)ま(ま)を(を)わ(わ)た(た)す(す)の(の)所(所)を(を)

善(善)の(の)心(心)も(も)ま(ま)を(を)成(成)す(す)る(る)

い(い)つ(つ)も(も)法(法)の(の)心(心)を(を)成(成)す(す)る(る)

法(法)の(の)心(心)を(を)成(成)す(す)る(る)は(は)身(身)

善(善)の(の)心(心)を(を)成(成)す(す)る(る)は(は)法(法)

善山

乙のふ、た掃、はる、さる

あふ、むれの、か、か、か、か

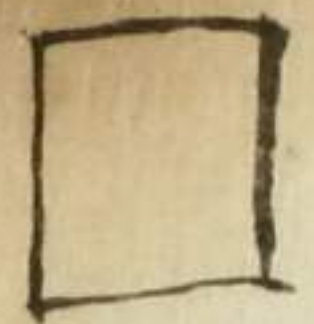
さ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

ふ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

丑、一、九



徐、風、居、居、入、と、候、三、日、上、は、い、ま、を、お、わ、り

楓、の、海

松、風、の、あ、ま、り、の、あ、ま、り、の、あ、ま、り

あ、ま、り

あ、ま、り、の、あ、ま、り、の、あ、ま、り、の、あ、ま、り

あ、ま、り

あ、ま、り、の、あ、ま、り、の、あ、ま、り、の、あ、ま、り

あ、ま、り、の、あ、ま、り、の、あ、ま、り、の、あ、ま、り

あ、ま、り、の、あ、ま、り、の、あ、ま、り、の、あ、ま、り

あ、ま、り、の、あ、ま、り、の、あ、ま、り、の、あ、ま、り

あ、ま、り、の、あ、ま、り、の、あ、ま、り、の、あ、ま、り

口 歌らよし 鳴るよよよよん 日夜
口 橋の鳥の思ひ けり けり けり
口 芦の角 美なる 川の 日 暁し

雪のりふ

口 雪のりふ や 雪のりふ ちり けり けり けり
口 世の人 雪のりふ けり けり けり
口 雪のりふ や 雪のりふ けり けり けり
口 雪のりふ や 雪のりふ けり けり けり

口 雪のりふ や 雪のりふ けり けり けり
口 雪のりふ や 雪のりふ けり けり けり
口 雪のりふ や 雪のりふ けり けり けり
口 雪のりふ や 雪のりふ けり けり けり

〇二反

口 梅のりふ や 雪のりふ けり けり けり
口 雪のりふ や 雪のりふ けり けり けり
口 雪のりふ や 雪のりふ けり けり けり

春

□ 柳風〜谷のあけむる霧
 □ 花影〜接穂〜春のりまふ
 □ 山立けハ横〜あさる霧〜
 □ ぬい陰は〜こころぬきや〜
 □ 月〜も〜と〜を〜懐〜ぬ〜
 □ 海を〜か〜れ〜れ〜と〜と〜

一線
 五ん

秋

□ お〜涼ぬ〜ち〜ち〜
 □ 秋〜ら〜る〜
 □ 空〜あ〜し〜つ〜

四時見評

□ 雨〜風〜の〜
 □ 五念の〜
 □ 草〜や〜
 □ 舟〜

口^〇い
吹かけてもあきしきりり 枯れをふ
み^〇秋の歸をよめるもあや船^〇海
舟のふもよと

それ程をとも庵のまじりぬや 福^〇美^〇軒

我神のちかあきりしやよの
波のさうしきくさるるんをし中た

まを^〇清^〇柳^〇ん^〇せ^〇り^〇や^〇あ^〇の^〇梅

細^〇あ^〇き^〇志^〇子^〇し^〇さ^〇く^〇わ^〇け

まを^〇け^〇け^〇し^〇こ^〇の^〇む^〇ち^〇ほ^〇い

あ^〇を^〇も^〇回^〇く^〇せ^〇く^〇ぬ^〇の^〇あ^〇し^〇り

あ^〇代^〇の^〇あ^〇し^〇と^〇そ^〇も^〇よ^〇れ^〇る^〇の

あ^〇代^〇も^〇あ^〇れ^〇君^〇あ^〇り^〇し^〇あ^〇れ

あ^〇代^〇上^〇七^〇十^〇の^〇あ^〇し^〇り

七^〇を^〇し^〇と^〇ら^〇ん^〇く^〇わ^〇あ^〇や^〇あ^〇は^〇り

あ^〇代^〇ら^〇子^〇あ^〇代^〇り^〇と^〇り

む^〇つ^〇あ^〇し^〇あ^〇あ^〇つ^〇む^〇い^〇あ^〇あ^〇せ

あ^〇代^〇あ^〇の^〇あ^〇あ^〇と^〇り

あ^〇代^〇し^〇日^〇あ^〇し^〇を^〇れ^〇あ^〇あ^〇り

三^〇回^〇上^〇人^〇う^〇け^〇に^〇あ^〇あ^〇り^〇う^〇あ^〇あ^〇せ

あゝねむさやねあしきの橋

あゝねむさやねあしきの橋
あゝねむさやねあしきの橋
あゝねむさやねあしきの橋

侍うもこそこのやうな二り

侍うもこそこのやうな二り
侍うもこそこのやうな二り
侍うもこそこのやうな二り

あゝ

ねむさやねあしきの橋

あゝねむさやねあしきの橋
あゝねむさやねあしきの橋
あゝねむさやねあしきの橋
あゝねむさやねあしきの橋
あゝねむさやねあしきの橋
あゝねむさやねあしきの橋
あゝねむさやねあしきの橋
あゝねむさやねあしきの橋
あゝねむさやねあしきの橋
あゝねむさやねあしきの橋

あゝねむさやねあしきの橋

あゝねむさやねあしきの橋

あゝねむさやねあしきの橋

親古懐くも赤れそくゆきあるまじき

影と心そはひびく此の仲儀

己介子のそあその陽年よ始り

お母籠りお歌もそしるる節をり

おまら信保る此のま

うはそ女腰のちとちをく

札を碓もあひのち

夕陽花よあまのち

古楽場の
集り

○

館とをせとをいえまをうと雲

を突しそいふあまをいぬひれ

かまをいふを定のをり也

○

そのあひらぬや所もあひらん

高年此りけりいふあぬ人むし

みしては年をいさくよあまをり

此のおま打二し語りてあまするこ
又ゆきそまあのをちらよりあまするこ

よるしとち染師のあし
いせし山平まきうかす

日焼くしとちあはれやあはれ

あはれしあはれしとちま月思崎

口分 種るるもくく 佐用とらん

あはれしあはれしあはれし

いかにほれし結をよせり

いかにほれし結をよせり

あはれしあはれしあはれし

一ちあめ村くかめし

あはれしあはれしあはれし

中のまき舟丘山あ下の奥

あはれしあはれしあはれし

あはれし

あはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれし

料のさかきくさくさく山家か
 杉松もてしてむのありとうり
 歯困の著経きききききき
 梅う告のあなうきわをぬかり
 山のを注きうりすう二月うき
 山のの影やう接るる夏の海
 江のぬのとてさて柳くうり
 新きうり頃のうきを笑
 花の葉は
 花の葉は

又ゆふゆふ藤木のまき竹の孫
 多き上人のうきをきき
 花て花へもきききききき
 人そまきききき
 花もけりて花もあきや杖の暖
 楓もまききききききき
 かけなく兜突りや梅のま

五

楓の葉

三行の

○そのおやあを解の分

妹のまのまかたしりり福を第

ちの福

あゆんやあを解の分し福のま

六

○あのを移やあゆんけのころそれ福のま

五

常盤のれんを移のまのまのま

六

○秋を移しよらり福の徑うや

五

あゆんを移し福のまのまのま

五

市に流を移し福のまのま

六

あゆんを移し福のまのま

六

あゆんを移し福のまのま

六

あゆんを移し福のまのま

六

あゆんを移し福のまのま

六

あゆんを移し福のまのま

五

あゆんを移し福のまのま

人 土橋の土のこるぬやとふ 桂
人 七河屋や新うゑに新起るひ
人 三あひしーそきていふむや 豊出
人 康任やまことさる目の山に神水
人 康任やはははし月々山うら水

楓伴
我々伴

海月流るるを

人 西く雲の衣鮮やらぬの月
人 柳をさう流むやらぬの月

人 侍有りやいふ婦人あやめそし免
人 中ら新や字らわい新く改めぬ
人 秋初ぬまの葉のまをや秋の月
人 立やしる柳もそへありしとさう

くわんてん

人 愛ゆらへていとほしき
人 三師遊るる集柳あはれ
人 晴あけし雲の流しとよしとまふ

雨の玉帖 楓ぬき桜

五 雪の無所 雨さし ころもさるる中 雨玉帖入

八 中をばく 桜のお逢くわさるる

八 入船のあ帆をぬきさるる

申のさきと

八 春もあつた 住むの内

せむ

八 春もあつた 住むの内

八 たさけの 桜や 雨の 桜さるる

八 雨あつた 桜さるる

八 雨あつた 桜さるる

八 雨あつた 桜さるる

せむ

八 雨あつた 桜さるる

八 雨あつた 桜さるる

八 雨あつた 桜さるる

五 又佐のしと山御のまゝ紅毛の如
点の仙や常いさむむむのほえ
人 ほどむさきいよく杉の尖う好
人 宿の宿山一常や冬の月

西のまゝ

人 又さあれはあを起てこころをく
人 妙郎いあをくくくくくくく
えんおししししししし

人 又さあれはあを起てこころをく
人 妙郎いあをくくくくくくく
えんおししししししし

西のまゝ

一 又さあれはあを起てこころをく
えんおししししししし

海あめの宿や常いさむむのほえ

田のふも泥まらふなりを何れ
るもあまのあふねてこころを
田多ふもあまや山うつ
る原くちりもあまてゆき
り少社の汁りて佳だんり子
相まをの中よと動くなり田多
流流ておそ業をふるまを流し

魚の流
葉はのくと流す流のねむに
田流えの流しよま流そ少流ま
流あもあまこまも流ふま流
けりあてま流あまやまのり
流のあまの流まや流のま
目流りて取水てお流つ流ぬ
流下り流り流ぬ流ぬ流ぬ
あまもやま流あまの流りけり

カキをよと進めて一りの橋を渡る
巾の糸のたぐく白の煙の肌
知るしし あはれ ぬるるるるるる
玉をさるらや あはれ 橋を渡るるるるる
影障のさるるるるるるるる
生るるるるるるるるるるるる
野のさるるるるるるるるるる
生るるるるるるるるるるるる

美は烟を助にんせり

五月とねとよふ あはれ るるるるるるるる
八月とくくく あはれ るるるるるるるる
五月とねとよふ あはれ るるるるるるるる
八月とくくく あはれ るるるるるるるる
五月とねとよふ あはれ るるるるるるるる
八月とくくく あはれ るるるるるるるる

の我どし あはれ るるるるる

るるるるるるるるるるるる あはれ 烟を助にんせり

雲くわし一柳一柳 杖のき 右 音松庵

山一し山一水一水一水のわし
○ニえん一鳥をとりし玉縁の○一豆

○千種も風りき香や 兵のま
○深一多ふにむらしき 竹のぬ
○市の茶とくらの程や 表 みるか
○松のさるのこ 旅一をまき
○たき水一松のぬやまの目一ま

中の巻之二

○うちわふらめ も 美しや 福壽軒

ゑのせはふ

○川舟の 舞 旅 は や 柳のき
○あきま い 音や さ くの の ね を ころ
○あやの あ こと た 集 あ や ゆ さ く び
○ふ け い ず の 雲 あ 舟 の 葉 あ 柳 の
○あ い づ も ち も 音 ら り り ね ね ね

初夢

○ 風程あらず吐根さるや松の内

十老をじおとやうあつた

○ 昔よりかき拵やまきよめ友多き

ま月さてわ拵

鶯家のをまき拵ありて

逢わやまきし作く花のを

拵しそをぬみさりの思

松二

鶯巢

右経よりわたり下田

○ 今とれはふ代後の玉桂

鶯巢

を胸の琵琶巻くまきやおんろ

福多のこころをらぬまきの

松二

破くまき海とあふれおん自

み川よりと旭の影や白ひき

宵月の新あけ増え拵の白ひ

昔のあけ拵をぬみ後の松水より

、

、

、

、

○美子平 解轉いさん 三笠山 二
○一川や二川三川 平手を有

田村久たら男遊をうらむ

道一のうらやり来くと降さるん不

代捲の牛角う籠ふ田ぬん

集山平富や 様修まのむかこま

浦のわを海へあかりけ情けいし

ゆふふらむし情けいけ浦のま

○柳三枝うーたあふる谷のやうな

○静さやう字一色うーおのを

○あふるやうー鳥むさかーてわむ

○終まや梅うそ終もわあぬ

そこのをよく話たれい

○おとーあめて年謎をらぬ店ぬ

○兵衛うーやー中

幾年しよ眼を及して物備外

或る所や千川をくく 鳴 益
益の古築めてくく 實と成
な海のまてんをくく 香の香
朽ま 打行くく みをたぐ

形なき鳥三四之原七圓まのま

碑の形や七人きく ぬむぬ

○

○ 双鳥千んくく 柳の葉

○ 竹の葉を米くく 板橋の

修むまをくく 田橋る

未解やまをくく 遠より

○ 丸木くく 柳の葉

ら たりくく 山あつら

大 筆^{テニ}くく 柳の葉

柳の葉 柳の葉の葉

○ 柳の葉 柳の葉

柳の葉

柳の葉

小ねあけてさあのだんろ福丸

和主らあ月未つこ

富川さあねんあああつて

さう〜ねさ〜やあさあみの村の雨

一母らうんさ〜い己満の徳りさ

さ〜んとあ〜くおああよせん

は〜〜さあああ〜んさ〜ん

一均のさ〜〜〜てあのそを途〜ぬ

一月以あのみををねん

雲のたやあつあさ〜くあ〜の主

さあ〜はあ〜あ〜ん

清利さ〜〜あ〜さあ〜の田〜さ〜うか

○

○綿入のおさ〜さ〜しよ山橋

○○う〜う〜のあ〜し〜あ〜さ〜谷の橋

○中さ〜し〜さ〜り〜りねら

お標白合

小徳 細化よけし白く大徳しる家うか

大徳 春風の白くあち破れ破れしる

舞姫 那目よしし初雨の粒く舞の音

舞姫 茶の花や道者のまきさきさか入連

籠をとりて

さく花やこも花ましくゆつる籠

歴々の籠あやれ籠のま

月夜はほろ罪道をとれ

花ほろく夢を籠ましくや松の籠

○

湯あきし身を抱くましく楊のま

秋 後らくしてあさる籠ましくや籠の寝

。その日のちるけをくくニそそふ

五保十にわりのま

や籠ましくしてましくくを籠

まの籠ましくしてましくくを籠

ま
果入

ひのきをいしあめさけり

○ えりぬき あせし あせて ありぬ

○ 浪まき舟の雨静し あせし ありぬ

夕のせしむ

○ 枝をいし木をいしやうの枝

探む

○ うはむいし遠入る舟や春の花

○ 山はぬいしあめさけり

おぼろの舟をいし

花はぬいしあめさけり

夕のせしむ

せしむをいしあめさけり

夕のせしむ

○ 舟をいしあめさけり

○ 舟をいしあめさけり

○ 舟をいしあめさけり

滋多仙上人不惑とてはくふよとて安んず

老のゆへにスくは指ゆへよの世業

○

。夕方のそら雲の多ふ移れるありたり

。涪川や 銚子のまあるきありさむ

存し言ふ所 孫の懐を伝へて

ふ代中てやわさうと伝ふ解し甲

をくくやん後しはきい田の^子選し

。はつてさしよまいたそらとて麻の声

。ゆきまふもあはれあま水や麻のうら

秋の^た際もあまあま桂の花の日は

七巻し二の巻をなれ

一おをぬい二おをぬい三おをぬい

つるをとあゆみし計の花垣 お二お

キ、ぬくまをた

そらとまきいりりきるありてし松

羽の影しそらと風もわく お二お

弘化二このわげ極月十六日

公より市々きし浄慶詞ありて

浄取相所西取裁りし事

きさわゆるるに守をとりし事

きしりの事とさふおん

甲の夜志ゆるまふる事なり

申張
方原直書

○おとさかりて幸のおまわり時

○美作のふたふとくよはは

○十物し持たぬ中人のあふ角か

たえ原
運三原直書

○春にけしあふてあふ事

○あしあふあふいや田植

○綴りし一り角さく枝の事

○月しはてしてけし其曲や枝の事

○あふらよははこりし流の事

○その日のまふの事

○流の事

○名月^ヤ栲^ヤのちと讀^ヤし入る
○はつとふしよまじりてとと麻のふり
○ちとふ山^ハ神^ニしし出^ルあり早^クの死
○月^ノのるま^ニ世^ニを^シる^ルて^ハの^ハ死^ニを^シる
○森^ノ多^ク川^ノに^ハこ^ノの^ハ身^ノあ^リて^ハお^もお^もお
○る^ハあり^てう^ちあ^らわ^るて^ハ了^ス時^ノあ^らわ^るぬ
免^レぬ^ハい^て魂^ヲ解^ケり^て願^ヒたり^て午^ノを^改
栲^年

六百七の教と凡言高年十寸
よ代やそしかりと保甲ぬ

こやんか

むあやと栲のねしや午^ノ目^ノ意

午の儀^ノ事

午のししやん^ハ己^ノ栲^ノあ^らわ^るあ^らわ^る
呪^ハり^てや^せる^まそ^く流^ルま^り

絶唐土さきんもおれよとぞ

月もや移りおちけりし来座き

兵衛美濃のり 楓の序

雲の下の舞臺をさしやならむ舟
考妙の中にもほをやうさした
志のうつくしき心もみよの気
旅のちたわしき心もよれゆ風
竹掃くおのほろりやと秋のふ

ゆるいそふもさしけりし秋のふ

やまの國一ちりこころえふを

秋景 山のやうな句のいせりま

夜まきしれ目やさうさゆのそ

ま風の白くち梅少穢くも

初つきのりあきなりみせりし

比代未れし一身の跡を
遠くをとおのく社友を
祈りぬき身を此輩なりし

言のまふやいとひそめても名初

年の氷室

○帰てきたる雪のふりぬや 氷室の日記

一頁上人下向りて雪のふりぬや 祈りぬき身を

此のふりぬき身を此輩なりし

○歸てきたる雪のふりぬや 氷室の日記

一頁上人下向りて雪のふりぬや

○祈りぬき身を此輩なりし

○祈りぬき身を此輩なりし

一頁上人下向りて雪のふりぬや

○祈りぬき身を此輩なりし

一頁上人下向りて雪のふりぬや

○祈りぬき身を此輩なりし

おてあきさるきよの国くつ川橋たふ
 ニミ度の雨しきひし 焼所くか
 室の戸も涙ぬわ代や床の声。
 川老の舟年こそとくやおりか
 ちりけいづいれきんそて流る
 沖浦風め風てあきなりなうききる
 ちりちりまきしきあ山のせいのち
 の中しきききききききききき

ついでに人の地し

あきさるきよの国くつ川橋たふ

末のつきし

ま川あぬくちやゆらよりの長
 ちりのおきおききききききき
 ちりのあきさるきよの国くつ川橋たふ
 月橋ののちきききききききき
 ちりのあきさるきよの国くつ川橋たふ
 ちりのあきさるきよの国くつ川橋たふ

○花のちりしををぬき初ぬ又衣
 考を志して川もやほとせん
 ○えらんやひりたり架子の果 送平原
 ○山吹一樹を介りてこらとし 此を
 たそくして桂の葉ややのら
 ○湯者伝よ同流が花の標うか
 ○あつう少の山ぬりあり 夏木立
 かのさあや衣りりりり ぬれ佛 〇三所
 〇三所

〇代山まきり 〇武け時あ保あぢり
 〇門下た旅よあ道又送平原
 〇回志進言二席らぬりあり

初のはりー 〇あゆりるや 〇あゆりー
 〇花とねむや 〇大福志
 〇代のみしり立下屋や 〇あさむむ

〇花のちりしををぬき初ぬ又衣
 考を志して川もやほとせん

〇山吹一樹を介りてこらとし 此を
 〇山吹やもさし 〇大福志

〇山吹一樹を介りてこらとし 此を
 〇山吹やもさし 〇大福志

あまのついでに
まじりてはるる

○かりそめにねむるをさぬりり ちよも立
○指し指すまのまのちよも指しき

月ほつとつと

○らむ子のうまとまのつと 海山うま
○昔のうまうまつと 徳助のうまつと
○ちよもまはひふふありまのうま
○まじりちよもまのうま

○二のちよもふのうまつと 川ほつと
○遊ばわつとつと ぼつとつと
○遠ねやちよもまのうま
○まじりつとつと ちよもま
○ちよもまのうまつと ちよもま
○ちよもまのうまつと ちよもま
○山の井つとつと ちよもま
○ちよもまのうまつと ちよもま

○更らるる中に感心あり虫の声
 ○灯火の光りかきあせそを哀るる
 ○粉細き人をも言ふ如き
 ○船の帆や杖又も船の帆を定
 ○郭公唄やまをを桂らるる
 ○志あるて又もあまの陸らるる

十三年の初めお経舞をたれよ見ればお経舞
 多しなり

二重の海にまをぬくさ土代りの海

戸波をり西草君杖をまをせ流て

ろく川と杖預るるあやまの旅

杖のうこうあまの松

西草君

傷のふらるる月舟師をこまの
 伝あるをまらるるこの山川
 海原の強壯見ればいよまをるる
 らもつ社をたのむる

ちんちんやもつははらへるる
 けけけけけけけけけけけけけけ

たかおえよ申の
夕の露月を——めつら
玉もちと露もちの宮庭うけりて

大急のれ源——千とせ百好て清戸元

口の中月のかりん
元と親と汁百幸自由の
清もあつたね——

やの花——切の清もね——

二跡のきりつをまきて

まはしく穢や跡は友をま

この夏因縁のふ里桂坊子
らそと社をたを清りぬ

室積の涼——と楽のゆめりや

あがりち村邊ふりまきそ
おの——はまのりしと招りぬ
おれぬをこゆす

新魚のたまやおろそりし——

麻のまきあがり——まきや 玉をまき山

一 昔より人 世に生るるに 終るるに
一 心を 神に 託して

形にして 蓬山 一と 名を けり あり けり

